

沿革

西園寺公経、実氏親子が1224年ころに作庭記風の庭園を作り、藤原定家も明月記で池泉が瑠璃色の美しさであることを記している。この鎌倉時代の庭は1397年に足利義満が譲り受け、舍利殿（金閣）などの諸堂が作られた。この庭は龍門瀑、芦原島、岩島の部分は、明らかに鎌倉時代の特徴を示していると言われている。義満は庭園から建物にいたるまで西芳寺に範を取った。なお、この閣の二階、三階の床は全面に黒漆が塗られている。このような仕掛けの中にローソクを灯すと、金色の阿弥陀様はあたかも万華鏡の中の幻想的な極楽浄土の世界のようになる。

龍門瀑 この滝とほぼ同様の滝が、その名を示す天龍寺にある。ともに中国の故事にある「登龍門」の由来である鯉が、三段の滝を登って将に龍に化す様を現している。中国南宋よりの帰化僧の蘭溪道隆禅師が中国の故事にある登龍門（鯉が死を賭してまで竜になるべく努力するさま）に倣って、人間が観音の知恵を得る（悟る）まで、努力をしなければならぬことを日本庭園の形で教えている。庭園のテーマが滝になるのである。

坐禅石

龍門瀑の付近に銀河泉、巖下水がある。その付近に坐禅石と思われる巖がある（永保寺・西芳寺の坐禅石とそっくりの形状）が、これを坐禅石と考える。ただ形が似ているからではなく、坐禅石こそ禅の道場の要であるからだ。

庭園の造形

- ・鏡湖池には10個の島があるが亀島が5島、鶴島が3島、芦原島と淡路島である。
- ・葦原島（日本）を管領の細川氏が舵を取っている（金閣側からの景）ようにも見立てられる。
- ・舟から金閣を見ると、左側に亀島、右側に鶴島があり、その奥には金色に輝く水面の上に、鳳凰が飛翔しているように見える。将に蓬莱山の姿だ。

龍門瀑付近

この庭園の最も重要な場面である。禅の物語が全て含まれている貴重な庭である。龍門瀑、鯉魚石（2匹）、碧巖石、坐禅石、観音石、猿石がワンセット揃っている稀な例である。

その風景は

猿抱子帰青嶂後 鳥啣花落碧巖前

猿は子を抱いて青嶂（せいしょう）の後（しりえ）に帰り、鳥は花を啣（ふく）んで碧巖の前に落（お）つ



これぞ多島式庭園の原点である。



